

Title	甲骨文祿, 河南通物志(孫海波氏著)
Sub Title	
Author	保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.210(708)- 211(709)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大きいと云はねばならない。

この城址は極めて廣大な地域にわたる爲、從來の調査は小部分にのみ限られてゐたのであつたが、茲に鏡山氏によつて全般にわたつて城址の精密な實測圖が作られ、その廣袤・規模が明らかにされたことは蓋築城史上に怡土城の有する價値を築城史研究史上に有するものと云へやう。僅々三十頁許の記述ではあるが、怡土城の由來、沿革、文獻にまで解き及ばれてゐる。特に折込の怡土城址全圖をみる時我等は氏の勞の大なりしを察す可くもあるまい。

第七 雪野寺址發掘調査報告 (菅原亮吉氏著)

私は上野の博物館で奈良朝出土品の特別展覽會が催された時、この寺址から出土した遺物を始めて見た。其時この寺址出土の塑像片の前に我を忘れて立ちつくしたことを覚えてゐる。今この報告書の紹介を書くに當つて圖版を何回かひつくり返しながら「平野のたゞ中の丘麓に、砂白き清流の陽に聳え立ちたる寺院」(六六頁)の姿を想像してみた。そして心なき遺蹟の破壊さへも亦當然なんだらうかといふ氣にさへなり得た。

本書に於ては遺址としては塔址と、講堂址と推定せられる「第二遺址」とを中心に調査せられた結果を記述されてゐるのみであるから、今後の調査に期待せねばならぬ所も少くない。遺物としては調査中に出土したものは勿論、諸家に分藏されてゐるものをも探査集成し、極めて詳細に記述されてゐる。これは法起寺式伽藍配置の一寺址であるといふよりも、珍奇な遺物を出土した寺址で

あるから大々的な發掘よりも散佚せる遺物の聚成がより急務であつた爲ではあるまいか。そして其等遺物の總てにわたつて遺址との關係を求められてゐる點に私は最も敬意を表すものである。後論に於て著者は少い史料を考證し、斷片的な遺物を驅使して荒廢せる遺址に、雪野寺を復原再建し終つてゐる。著者の耳には落慶供養の讀經の音さへ聞えてゐるのではあるまいか。

(保坂三郎)

甲骨文 錄 河内通物志 (孫海波氏著)

河南博物館に所藏する處の凡三千六百版の龜甲獸骨文字のうち九百三十版を選択し、その一々に釋文を附し、必要に應じて考證をも加へたものである。印刷のよいことが此の種の本に特に望ましい所であるが、本書はその點では他の本に優つてゐやう。

然し特に大きい問題を提出してゐる所もない。近來甲骨學流行は支那に於て極めて著しいやうであるが、型にはまつた研究が多く、顯著な發達もみない。例へば相當長期間にわたつて用ゐられたらしいことは、橋本先生の曆法上の研究からも明らかな處であるが、その他からも指摘し得るのではあるまいか。書體の著しく自由なものがあるかと思へば形式化されたやうなものもみえる。又卜文に於ても同じことが云へるのではあるまいか。かういふ方向へも發展の餘地があるやうに思はれる。

ともかく本書は新資料を提供されたものであるから、斯學研究者は一本を備へ付く可きであらうし、甲骨學を瞥見せんとする人

には手頃の書である。(保坂三郎)

哲學史學文學論文集 (九州帝國大學 法文學部印行)

十周年 念法學論文集及び 十周年 念經濟學論文集が九州帝國大學法文學部より刊行され學界に寄與する所尠くなかつたが、今回更に同學部より 十周年 念哲學史學文學論文集の印行を見るに至つたことは學界のため寔に欣快の情を禁じ得ぬ。

本書には哲學史學及び文學の三部門に互る論文が収録されてゐる。先づ史學に關する論文としては、長壽吉氏のハプスブルグ・ブルボン兩朝爭覇時代ナント勅令廢止前の時期に於ける北歐小國の動容、重松俊章氏の孫吳の對外發展と遼東との關係、日野開三郎氏の便錢の語義を論じて唐宋時代に於ける手形制度の發達に及ぶ等を擧げることが出来る。長氏は其の論文に於て特に普露西侯國に就いてのみ説述し、他の北歐小國の動容に就いては之を省略されてゐる。重松氏は其の論文に於て特に江南の孫吳と遼東の公孫氏との政治、經濟的關係を中心として孫吳の對外發展の歴史を概観されてゐる。日野氏は其の論文に於て、便錢の語義を考究し、此の語義轉訛を通じて便錢の發達過程を明かにされてゐる。然し論述の範圍を主題の如くに限定したため、便錢に關する數多の重要論點を貴稿の範圍外に取殘された。此等の點について日野氏は何れ後日機を見て補足されることになつてゐる。其の他史學に關係ある論文として楠本正繼氏の宋明儒學に關する一考察、春日政治氏の西大寺本金光明最勝王經の白點について、小牧健夫氏の新

たに發見されたグライスト書翰について、豊田實氏の英和及び和英辭書の發達、吉町義雄氏の九州方言通信調査概要等を擧げることが出来る。尙本書には中島愼一氏のルツソーの國家論、佐久間鼎氏の默照體驗の意義、佐野勝也氏のバルト神學の根本問題、矢田部達郎氏の學習過程に於ける禁止及び促進の問題、新開長英氏のカント哲學に於ける道德的目的論の意義について、田中晃氏的人格の社會的規定、秋重義治氏の知覺的空間の構造に關する實驗的研究第六報告、佐藤通次氏の愛一言學によつて語る哲學、小野島行忍氏の梵詩リツ・サン・ハーラ和譯、Seichi Naruse 氏の *Mon-faigue et la Sagesse Extrême-orientale* 等哲學に關する論文が多く収録されてゐる。

要するに本書は九州帝國大學法學部が多年學界に寄與された一大紀念塔とも稱すべきものである。われらは現時の九大の法學部教授、助教授講師諸氏に敬意を表すると同時に、今はなき同學部の故教授、助教授講師諸氏の靈に合掌するものである。(宮島貞亮)

齋藤先生古稀祝賀會編 古稀祝賀記念論文集 (齋藤先生古稀祝賀會編)

本書は齋藤斐章氏が昨年古稀に達せられたのを祝はれて、氏の知友及び教へを受けた諸氏が起草せられた論文を集めたものであり、巻頭の中川一男氏の書かれた『齋藤斐章先生傳』及び『齋藤先生譜』齋藤先生著述年表』約八十頁に先生の長年の業績が述べられて居り、如何に先生が學界及び教育界に貢獻せられたかが判るのである。なほその著述年表によれば、先生の研究が歴史學全